

擬石・擬木を用いた 近代和風庭園

—琴ノ浦温山莊園の庭園調査から—

はじめに 景観研究室では、平成20年度に和歌山県海南市に所在する琴ノ浦温山莊園の庭園調査を受託し、庭園造営の歴史と構成・意匠に関する調査をすすめてきた。

調査成果は『琴ノ浦温山莊園 庭園調査報告書』としてとりまとめたが、本稿ではその概要を報告する。

庭園の概要と築造年代 琴ノ浦温山莊園は、製革業で財をなした新田長次郎（1857～1936）によって造営された近代の別荘庭園である。長次郎は大正元年（1912）に当地を訪れ、三方が海に囲まれその一端に山（矢ノ島）を配した風致を気に入り、別荘敷地として購入した。これ以降、順次敷地を拡張して主屋、茶室等の建造物を建設しつつ、庭園についても継続的な築造をすすめた。

別荘敷地内のはば中央に位置する主屋は、新田家の建築顧問・木子七郎によって設計され、大正4年（1915）に竣工した。当時の別荘建築に典型的にみられる、複数棟を雁行型に接続した書院造の建築とする。茶室「鏡花庵」は武者小路千家の家元名代をつとめた木津宗詮の設計によって大正9年（1920）に竣工し、幾何学的な意匠を軸とした自由な造形を基調とする。

このように、建築的にも特徴のある別荘施設群をそなえた本庭園は、黒江湾に面した海岸立地の庭とし、主屋の東と西に池泉庭を設ける。別荘の造営記録から、西池泉庭（図14）が大正4年（1915）頃、東池泉庭（図15）が大正9年（1920）頃に基本姿景が整えられたと推察され、その後昭和初期に完成に至ったと考えられる。池泉取水は海水を利用し、潮の干満によって池面水位を変動させる潮入りの庭とする点に特徴が認められる。



図14 西池泉庭の中島と石橋 南東から

庭園構成と意匠 主屋周辺部は、飛石を縦横に打って縁先手水を随所に配った書院庭とし、主屋の建築意匠ともよく調和したものとなっている。園路動線の交点に打たれた踏分石や各所に配された景石には、特に大振りの石を用いており、本庭園が大正期の大石趣味を色濃く反映していることを示す。

主屋東池泉庭は、書院庭のように細部に凝った意匠とは一転し、大池を穿って池内には中島を浮かべた開放的なもので、さらに護岸は大石で豪快に土留めした雄大な空間を呈したものである。特に中島を護岸する紀州青石（緑色片岩）による崩れ石積みは、すこぶる迫力のある造作である。また、この主屋東池泉庭の南面築山には、ウバメガシを主体とした大刈込を屏風のごとく立ち上げて築山上部にはクロマツを疎林状に配植し、海岸風致の象徴景を顕現させている。

主屋西池泉庭は汀線の東と西でその護岸意匠を一転させる。東岸は紀州青石をふんだんに用いて色彩的にきわめて派手な造作とするが、西岸は自然岩盤をそのまま活かした護岸とし、青石による石組護岸と岩盤による自然護岸とがダイナミックな好対照をなす。また、背後の矢ノ島にはトンネルが開削され、海峡への通景線も得た構成を現出し、池の中島に架かる巨大青石の石橋や沢渡りなど細部の意匠にも優れている。

擬石・擬木を用いた庭園技法 本庭園で最も際立った特色となっているのは、飛石、景石、池泉護岸、階段土留め、庭園家具などにモルタル製の擬石・擬木を大量に用いていることである。驚くのはその量的な多さだけではなく、「大石を人工製作せむと思ひ立ち、セメントを以て試作せるに一見本物の自然石と異らざるもの出来上がり自ら興趣を湧かしめた」と長次郎の自叙伝『回顧七十



図15 東池泉庭の擬石護岸と雪見灯籠 北から

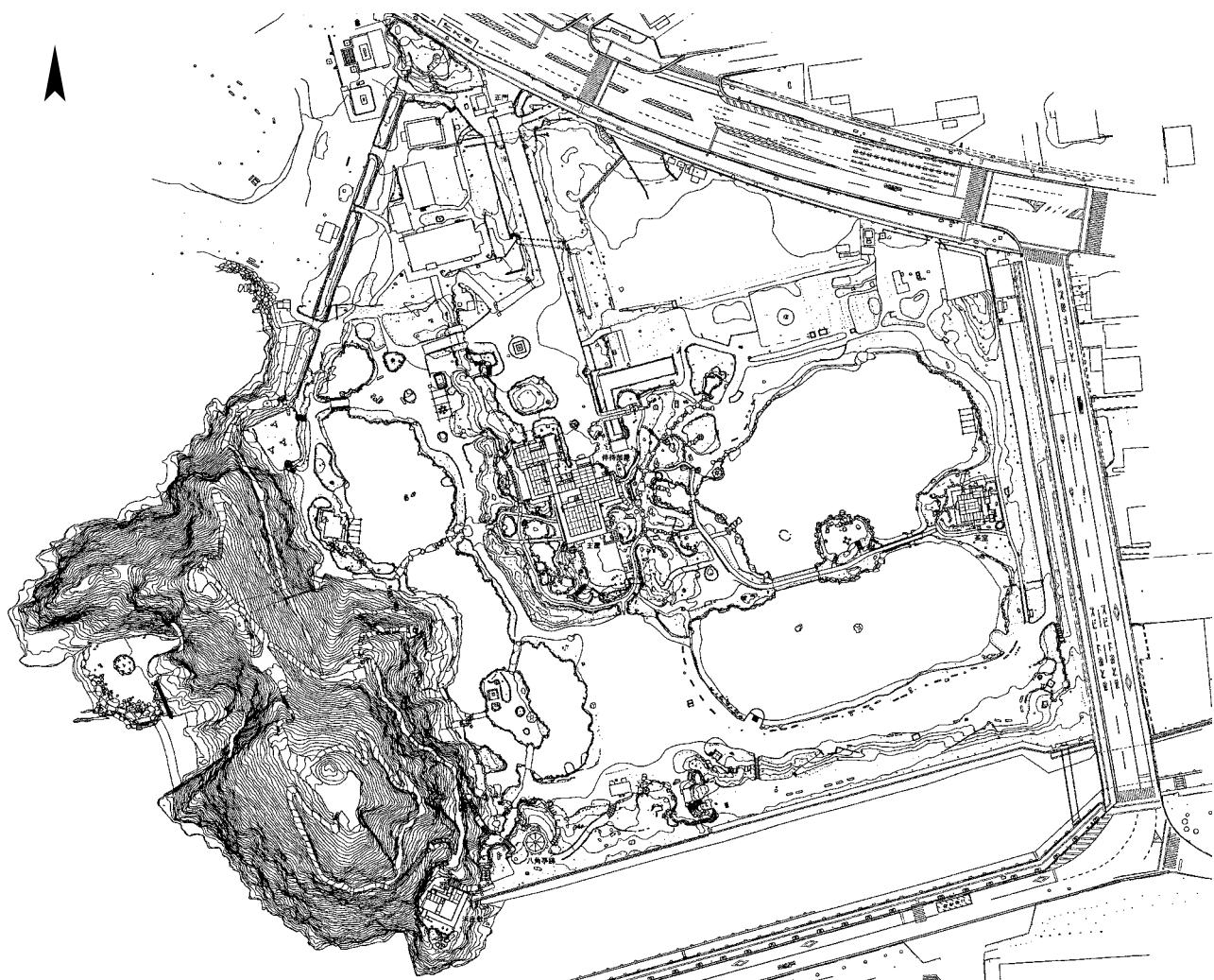


図16 琴ノ浦温山荘園現況平面図 1:2000

有七年』(1935) にあるように、長次郎自身がその製作をおこなっていたことである。特に、主屋周辺の飛石園路や景石、主屋東池泉庭の護岸石組などに、きわめて巨大な擬石による庭園造作がみられる。また石色も赤色、青色、暗灰色など、多様な染料を用いて製作している点が指摘できる。さらに園内には青石を模造したものもあり、石英が脈状に結晶した様子も造作している点は、製作技術の水準の高さを示す好模範といえるものである。これらは長次郎が大正元年(1912)の別荘造営当初から製作を開始し、大正後期には随所に擬石・擬木を導入し、その後昭和初期に至るまで部分的に手を加えながら現在の姿にしていったものである。

ところで、近代に庭園や公園が多数造営された東京、大阪など大都市圏では、擬石・擬木の工法が井下清、椎原兵市、松村重、橋本八重三、小林觀山ら、近代造園家

および造園技術者によって検討され始めたのが大正末期であった。そしてこれが方法的に確立され、造園資材として定着したのは、東京の有栖川宮記念公園池泉擬石護岸および擬木橋(1934)、大阪の天王寺公園和風庭園擬石製滝石組(1933)、京都の都ホテル庭園擬石製滝石組(1933)など、昭和8~9年(1933~1934)頃である。以上から、大正初期においてすでに長次郎によって擬石製作が着手されていた温山荘園は、擬石・擬木を利用した庭園として、造園史上きわめて先駆的な事例であったことが判明する。

また本庭園内には、近代造園における材料の変容を物語るコンクリート造庭園施設(眼鏡橋、正門等)も多数存在する。これについても、近代造園にコンクリートが導入された時期的動向を検討するうえで、本庭園はひとつの指標的事例と指摘できるものである。

(栗野 隆)